

氏 名 (本籍)	李 正 旭 (韓 国)
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	博 甲 第 6364 号
学位授与年月日	平成 25 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	敗戦前における村山知義の挑戦 －交差する映画・演劇・民族－
主 査	筑波大学教授 博士 (文学) 青 柳 悦 子
副 査	筑波大学准教授 博士 (文学) 齋 藤 一
副 査	筑波大学准教授 博士 (文学) 吉 原 ゆかり
副 査	愛媛大学准教授 博士 (文学) 中 根 隆 行

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、美術・演劇・文学・建築など多様なジャンルで活躍した芸術家、村山知義（1901 - 1977）について、これまであまり研究されてこなかった映画の領域に着目し、そこから村山の展開したさまざまな活動の革新性を明らかにしようとするものである。とりわけ映画ジャンルと演劇ジャンルの両方を手掛けるなかで、村山が二つのジャンルの有する特性をどのように認識し、ジャンル間の壁を乗り越えながらどのような新たな試みをおこなったのか、また村山が朝鮮人との交友を重んじつつ朝鮮文化をみずからの芸術活動のなかでどのように生かしたのかを議論の焦点とする。構成は以下のとおりであり、さらに巻末に資料を付す。

### 序章

#### 第 1 章 児童文化と思想－絵・漫画・映画

#### 第 2 章 民衆と映画－村山にとっての小型映画・移動映写を中心に

#### 第 3 章 村山における演劇と映画の融合

#### 第 4 章 映画政策と映画技術への挑戦－映画監督としての村山

#### 第 5 章 朝鮮と日本の狭間で－村山の「春香伝」を中心に

#### 第 6 章 1945 年朝鮮滞在－1940 年代の朝鮮・満州での映画制作と村山

### 結章

序章では、村山知義の全体像を概観するとともに、この論文の扱う時期を村山が映画方面に力を注いだ 1945 年までとすることを明示する。村山の映画方面での活動に着目することで、左翼文化運動とのかかわりや、多様なジャンルを横断した村山のあり方、そして朝鮮との関係が必然的に浮かび上がり、これまでの研究で見落とされてきた様々な側面に光を当てることができることを述べる。

第 1 章では、村山が中流家庭の向けの児童雑誌『子供之友』に妻籌子との共作によって載せた絵物語「3 びきのこぐまさん」（1926 年～1928 年掲載）が、1931 年に『三匹の小熊さん』（岩崎昶演出）として映画化されたことに着目する。また左翼思想をもつ村山は 1929 年に創刊された『少年戦旗』（1931 年末終刊）でも絵や物語の提供をおこない、プロレタリア文化運動に参画する。こうした村山の活動を精査して、教条的な左翼思想に陥らない、村山の柔軟な姿勢を明らかにする。

第2章では、村山にとって本格的な映画とのかかわりの端緒となった日本プロレタリア映画同盟、通称「プロキノ」(1927年創設)との関係を検証する。村山はプロキノで制作される映画に脚本を提供するほか、プロキノの支援団体である「プロキノ友の会」(1930年創設)の設立メンバーとしてこれに深くかかわった。いまだ研究の蓄積の薄いプロキノの映画活動の詳細を掘り起こすとともに、村山も積極的に支援し評価していたプロキノの小型撮影機・映写機の活用や既存の常設館に頼らない移動映写による巡回上映といった活動形態に注目し、こうした試みの中での村山の貢献について考察する。

第3章では、村山が積極的に試みた、演劇の上演における映画や映像の利用について検討する。演劇における映画の活用の開始は日本では1926年とされるが、村山は1929年から5つの演劇作品において、それぞれ工夫を凝らしながら、映像の活用をおこなった。このなかから村山演出の『西部戦線異状なし』(1929年)、同『太陽のない街』(1930年)、村山脚本の『勝利の記録』(1931年)をとりあげて、既成の映画フィルムの借用、着色が可能であった幻燈の利用、上演と同時並行的な映像映写による演劇とフィルム上映とのより緊密なコラボレーションなどを、可能な限りの資料を駆使して検証し、考察を加える。

第4章では村山が監督として制作した映画『恋愛の責任』(PCL、1936年)を検討する。この作品に関連してまず、村山が演劇と映画の二つのジャンルを人材面と技術面でどのように関連付けたのかを明らかにする。1934年から村山は新協劇団を主催していたが、劇団と劇団員の経済面での問題に対処し、また1930年代に入ってから映画のトーキー化にも対応するために、演出家・俳優が劇団ごと映画制作に参加する「ユニット映画」の形態を作り出したことに着目する。また、映画撮影技術の面では、演劇ではなしえない特徴を強調した真上からの俯瞰撮影や、逆に演劇のシーンを思わせるような長時間におよぶ長回しについて分析する。1930年代半ばに映画検閲が厳格化される状況のなかで、村山がどのような抵抗を試みたのかも論じる。

第5章では、村山による朝鮮の古典物語「春香伝」の映画化の作業に着目する。1939年に進められたこの映画化企画は結局実現されずシナリオだけが残されることになったが、村山と「春香伝」のかかわりは深く、1938年に演出家として実現させた演劇版は日本で朝鮮ブームを巻き起こしただけでなく朝鮮半島でも上演され、その後、映画化企画のほか、1945年までに二度、オペラ化も試みられた。こうした活動の背景として1930年代初めから開始される村山と朝鮮人文化人との関係をたどり直すとともに、村山が映画シナリオのなかでおこなった物語の設定の変更やシーンの追加について分析し、また台詞の中で朝鮮語読みを多用したことに着目して、村山のプロレタリア思想と被支配者・被差別者であった朝鮮人への共感をあぶりだす。

第6章では、1945年3月から12月まで日本の敗戦をまたいで10カ月間朝鮮に滞在した村山がおこなった活動に注目する。朝鮮行きの事情を精査するとともに、朝鮮滞在中の村山の行動を、新たに入手したこの時期の村山の日記の記述などをもとに検証する。とりわけ京城(現ソウル)から数度にわたって満州に赴き、満州映画協会(通称「満映」)での活動を積極的に企図していたことを明らかにする。また、この滞在中に映画制作をめざしてシナリオ(現在散逸)を完成させた「故郷物語」の内容を、戦後に発表したほとんど同内容と思われる小説をもとに分析し、村山が朝鮮人民衆へのまなざしをいかに持続けたのかを論じる。

結章では、論文全体の作業を振り返るとともに、硬直したイデオロギーを脱した柔軟な村山のプロレタリア文化活動家としての姿を再確認し、これを左翼文化運動史や映画史のなかに位置づける。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は何よりも、新たな資料の発掘や、これまであまり援用されてこなかった情報の効果的な駆使によって、1945年までの村山知義の映画活動と彼の周辺に展開されたプロレタリア文化活動の状況を具体的に照らし出したところに意義をもつ。

たとえば村山の絵本を土台にして作られたアニメーション映画『三匹の小熊さん』、村山のシナリオによるプロキノ映画『全線－東京市電争議』、村山の監督した映画『戀愛の責任』を実際に参照して研究に取り込んだことは、画期的な業績であると言える。これらの貴重な資料の入手が可能となったのは村山の映画活動を明るみに出すという本研究の強い目的意識と丹念な資料調査活動の成果であり、ここから本論文の独自性が生まれている。そのほかにも、長年にわたる研究調査活動の賜として、村山の朝鮮滞在の実態解明にとって貴重な資料である未出版の村山の日記（1945年分）や、村山の関わった東京芸術座や前進座の内部資料が研究に援用されていることは特筆に値する。また村山と直接接触のあった人々に接し、当時の状況についてさまざまな証言を得たことも、本論文の議論の方向性を定める上で重要な土台となっている。

これらの新たな材料を生かすことによって、1945年まで積極的に繰り広げられた村山の映画活動の詳細と全体的な流れが初めて把握されることとなった。それとともに本論文の功績として特筆すべきは、村山の映画活動に注目することで、その周囲に展開されていた興味深いさまざまな状況が発掘されたことである。たとえば児童・青少年向けのプロレタリア雑誌『少年戦旗』の実情、プロレタリア映画団体「プロキノ」およびその支援団体「プロキノ友の会」の活動実態、映画の興隆期およびトーキー化後の再興隆期における諸演劇団体と映画の関係、また本論文の論点の一つである演劇における映画や映像の利用の実際などである。

本論文のもう一つの意義として、村山と朝鮮および朝鮮人との関係を一つの重要な主題として論じたことが挙げられる。村山と朝鮮の関係は1945年の朝鮮滞在に関して論じられることが多いが、本論文では、1930年代初頭から始まる演劇を通しての村山と朝鮮人文化人との交流の経緯にまで遡り、さらに朝鮮の古典文芸「春香伝」に対して村山が示し続けた並々ならぬ関心に着目して、これを演劇上演・映画シナリオ執筆・オペラ化企画などを通して検証した。そのうえで村山の朝鮮滞在を位置づけることで、戦争末期の避難所として朝鮮が利用されただけではなく、村山にとって朝鮮が彼のプロレタリア芸術文化活動の可能性を拓く新たな場として機能していたことを示唆することができた。

考察面では展開の余地を認めるものの、本論文の一部は村山知義研究の専門書に収録されるなどすでに学界において高い評価を得ており、本論文は優れた学術的貢献を達成している。

平成25年1月12日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。